

現地を訪問して思うこと

文学部 2016 年卒 大堅 千怜

バスから被災地に降り立って、最初に印象に残ったのは、辺りいっばいに土ぼこりのにおいがすることであった。現在住む東京と比べ、東北は空気が澄んでいるだろうと思っていたが、土地の盛り上げや建設作業による土ぼこりのにおいに衝撃を受けた。復興への動きは、まだ始まったばかりなのだと感じた。

今回このような貴重な機会をいただき、震災後初めて東北を訪れることができた。震災当日、私は一日中テレビで震災の様子を見て、津波の恐ろしさを感じていた。しかし実際に何もかも流されてしまった場所に立ち、また勉強会にて当時の様子を伺うことで、津波の恐ろしさや、被災者の方々に立ちはだかっている現実を伺い知ることができた。特に閉上地区にて津波と同じ高さの碑を見たとき、こんなにも高い波の壁が襲ってきたのだという恐ろしさと、そのような被害に遭ってもなお懸命に生きている地域の方々や、同じ地で笹かま工場を再建された佐々木夫妻に、ただただ頭の下がる思いであった。

今回のツアーに参加するにあたり、出発前に「自分には何ができるのだろうか」と考えていた。実際、本当の地震の恐ろしさなど、当事者でなければ分からないのだろうが、被災地を訪れたことで、今までよりもずっと、防災意識の大切さを実感している。移動中のバスの中では、日頃から災害に備え、いざというときに災害弱者にならないようにすることが重要であるというお話を伺った。地域にはお年寄りや病気の方も多く暮らしている中で、まず自分の身は自分で守り、他の方へも手を差し伸べられるよう努力することが、第一に自分にできること、しなければならぬことだと思った。

仙台から帰ってきた次の日、東北を震源地とする大きな地震が起こった。私にとってこの地震は、本当に今回のツアーで学んできたのか、と試されているのではないかと感じた。また、ニュースで東北が震源地だと知ったとき、今回お話を伺ったり、お世話になったりした方々の顔が次々と浮かび、心配でニュースに釘付けになり、ツアーに参加できたことで、東北での出来事が全く他人事ではなくなったことが分かった。今回見聞きしたことをたくさんの人に伝え、また再び東北の地を訪れたいと思っている。